

原子力発電の安全性に対する信頼の構造

The Structure of Trust in the Safety of Nuclear Power Generation

渡部 幹 (Motoki Watabe)* 春名 康宏 (Yasuhiro Haruna)† 北田 淳子 (Atsuko Kitada)†

要約 本研究の目的は、電力会社や原子力発電に対する人々の信頼がいかなる構造であるかを明らかにすることである。この目的のために、本研究では特に電力会社の意図に対する人々の信頼に焦点をあて、質問紙法を用いた日米比較調査を行った。調査の結果、電力会社の意図に対する信頼は日本の方がアメリカよりも低いことが明らかにされた。さらにアメリカでは電力会社に対する信頼は企業一般に対する信頼と連動しており、一方日本では、それは政府に対する信頼と連動していることがわかった。この違いはアメリカ人が電力会社を一企業として認識しているのに対し、日本では電力会社を政府と同じものとして認識している可能性を示唆するものと思われる。

キーワード 一般的信頼、意図に対する信頼、能力に対する信頼、日米比較、政府に対する信頼、企業一般に対する信頼

Abstract The purpose of this research is to clarify the structure of people's trust in electric power companies and nuclear power generation. For this purpose, we carried out questionnaire surveys in the United States and Japan with a special emphasis on the trustworthiness of electric power companies. The results indicated that trustworthiness of electric power companies were rated higher by Americans than by Japanese. Furthermore, trustworthiness of electric power companies in the United States was highly correlated with their trustfulness in private companies in general, whereas one in Japan was rather correlated with their trust level in the government. This difference may imply Americans do not differentiate electric power companies from other private organizations, while Japanese assign a special status to them closely linked to the government.

Keywords general trust, trustworthiness, competence, Japan-the United States comparison, trust in government, trust in companies in general

1. はじめに

1970年11月、わが国で初の商業用原子力発電所として関西電力美浜発電所1号機が運転を開始した。以来、原子力発電による電力供給は増え続け、1992年度には総発電電力量（電気事業用）の28.2%が原子力発電により供給されるに至っている⁽¹⁾。そして現在のわが国の産業構造を考えた場合、電力需要はこれからも増え続けると考えられ、将来安定的に電力を供給するには、原子力による電源立地を更に進めていくことが不可欠であると考えられる。そのためには、安全運転の実績を積み重ねることが必要であるが、その一方で人々の原子力発電の安全性についての理解と信頼を獲得することもまた重要な

課題である。

しかし、このような原子力発電の必要性、重要性にも関わらず、現在でも未だにその安全性については不安を抱く人が少なくない。1992年、関西地域で実施された意識調査によれば、58.1%の人が「安全でない」と考えており、「安全だ」とする人の31.0%を大きく上回っている⁽²⁾。このように人々が原子力発電の安全性に対して抱いている不安をどのように取り除くかが、電力供給に関わる者にとって重要な問題となっている。

*北海道大学文学部

†社会システム研究所

2. 問題

2.1 原子力発電の安全性 の社会科学的側面

しかし先の問題はかなり複雑で解決が難しい可能性がある。その例として、原子力発電所の事故に対する見解が、専門家と一般市民の間で異なっていたという事実があげられる。1991年2月、福井県の関西電力美浜発電所2号機において蒸気発生器伝熱管の1本が破断するという事故が発生した。この事故による周辺環境への放射性物質の放出はごくわずかであり、環境への影響は認められなかったものの、一次冷却水の二次側への流出により非常用炉心冷却装置がわが国で初めて実作動するという事故であった。そしてこの事故は原子力発電に対する一般の人々の信頼を考えるうえで大きな転換をもたらすことになった。それは電力会社側と一般の人々との間に事故に対する見解の相違が存在したためである。具体的にはこの事故について技術者たちは「非常用炉心冷却装置が設計どおり作動し、原子炉が安全に停止した」⁽³⁾と考えたのに対し、一般の人々の印象はまったく異なり、「安全のための最後の砦である非常用炉心冷却装置が働いたことがむしろ怖い」⁽⁴⁾というものであった。すなわちこの事故は、原子力発電の安全性についての見解には技術的側面だけではなく、社会的な側面が存在するというを示しているといえよう。

上述の例は、原子力発電の安全性について理解を得るためには、単に技術的な向上をはかるのみでは不十分である可能性を示していると思われる。つまりこの事故の結果が示唆しているのは、同じ事柄でも見る人によっては異なった意味を持つということである。従って原子力発電に対する理解と信頼を得るためには、なぜこのようなことが起こるかを説明しなくてはならない。そしてそのためには自然科学的な視点のみではなく、むしろ社会科学的な視点が必要であると考えられる。

電力会社側もこの社会科学的視点の重要性を認識し、関西電力は1992年3月に原子力安全システム研究所を設立して、その下に技術システム研究所とともに両翼の一つを担う部門として社会システム研究所を設置した。この社会システム研究所では、科

学技術を社会科学ないしは人間行動科学の立場から研究することをその目的としている。そして本研究は、この社会科学的視点を持つ学問である社会心理学の立場から、一般の人々の原子力発電に対する理解を得る可能性を探るものである。

2.2 情報公開と人々の反応

政府や電力会社は、原子力発電所が稼働する以前から、一般の人々の原子力発電に対する理解を得ることを目的とした活動を続けてきた。具体的には、テレビコマーシャル、新聞広告、パンフレット等各種印刷媒体の配布、PRイベント、原子力発電所見学会など様々な方法を用いている。前述調査では、関西電力が実施している種々のイベントの中で「原子力発電所見学会」の認知率が最も高く49.8%の人が認知しているとの結果が出ている。また、「原子力発電に関する説明会」に関しては、34.8%の人が認知しているという結果が報告されている。しかし一方では「原子力発電に関する情報を十分に公表していない」と考えている人が33.0%おり、「公表している」と考える人の23.1%を上回っている。

このように人々が原子力発電に関する情報公開を十分とは考えていない理由として、人々の知りたい種類の情報が実際には提供されていないという可能性をまず最初に考えることができる。しかしこの調査結果はそうではないことを示している。この調査結果は、人々が原子力発電に関して知りたい情報は、「放射能の人体への影響」、「事故発生時の防災体制」、「放射性廃棄物の処理・処分」、「発電所の安全管理システム」などであることを示しているが、これらはまさにパンフレットや見学会で提供している情報である。すなわち人々は自分達の求める情報が届いているにも関わらず、原子力発電に関する情報公開は十分ではないと考えているのである。

2.3 電力会社の意図に対する信頼

上述の調査結果により、人々は欲しい情報が与えられていながら、まだ十分ではないと考えていることが示された。ではなぜこのような結果が生じるのであろうか。この結果のひとつの説明として、実は人々は今まで与えられた情報の量が不十分であると

考えているのではなく、むしろ今まで与えられた情報が本当であるかどうかに関して疑問を持っていることがあげられる。たとえば、ある人が原子力発電所で行っている災害対策に関する情報を得たとしても、その情報を本当ではないと思っているならば、まだ自分には十分な情報が与えられていないと感じるであろう。もしそうならば、人々は原子力発電の安全性についての情報が与えられるか否かを問題としているのではなく、その情報の源である電力会社への信用を問題としているのではないかということになる。従ってこの問題は、人々が情報やその源をどのようにとらえるかの問題であり、解決のためにはまさに社会科学的なアプローチこそが必要とされる問題なのである。

この社会科学の一分野である社会心理学における説得コミュニケーション研究によると、説得場面において、人々が情報源に対して持つ信用 (credibility) が説得を左右する重要な要因であるとされている。これはすなわち、説得場面では説得する立場にあるものがどれだけ信用されるかということが重要になるということである。先に述べたように、人々が原子力発電の安全性に関する情報を不十分であると感じている理由がこの情報源への信用の欠如であるならば、人々はいくら多くの情報を提供されたとしても原子力発電の安全性を理解することはできないと考えられる。それよりもむしろ、電力会社側がいかに人々の電力会社に対する信用を獲得するかが重要な問題となるであろう。

では信用を獲得するためにはどのような条件が必要なのであろうか。この説得コミュニケーション研究では、説得する側が信用を得るためには、2つの特性を備えていなくてはならないことがわかっている。それは、能力に対する信頼 (competence) と、意図に対する信頼 (trustworthiness) である。能力に対する信頼とは、説得する立場のものがどれだけの知識や専門性をもっているかということである⁽⁵⁾。もし原子力発電の説明をするものが、発電やエネルギー問題に関する知識を何も持っていないとすると、人々はそのような人のいうことを信頼しないであろう。すなわちそのような人は、能力に対する信頼を得ることができないのである。

しかし重要なのは、この能力に対する信頼のみで

は信用は得られないことである。そのためには能力に対する信頼のみではなく、意図に対する信頼が必要である。意図に対する信頼とは、説得する立場にあるものの意図に対する信頼である⁽⁶⁾。たとえば、人々が原子力発電の安全性に関する説明をする人に対して「我々をうまく丸め込もうとしているのではないか」と思っている場合、人々が説明者に対して持っている「意図に対する信頼」は低いことになる。このような場合は、いくら専門的な知識やデータを持つ人が説明しても、すなわち能力に対する信頼を人々から得られる人が説明しても、人々の信用を得ることができない。

この説得コミュニケーション研究の視点から考えると、いままで政府や電力会社の行ってきた人々に対する説得——各種PR活動やパンフレットによる情報の提供——は、主に前者の能力に対する信頼を高めるためのものであったと考えられる。これ自体は重要なことではあるが、先の議論で能力に対する信頼のみでは不十分であることが指摘されている。つまりこれまでの電力会社や政府の方策は、信用を得るためのもう一つの側面である意図に対する信頼をあまり重視してこなかったのではないかと考えられるのである。この観点からすると、人々がいくら情報を提供されても原子力発電に反対しつづける一つの理由として、人々は原子力発電の技術的な安全性の証拠に対してよりも、それを公表する側の意図に不信感を抱いていることが挙げられる。もしそうであれば、いくら説明会やキャンペーンを行っても無駄になってしまう可能性があるだろう。そしてこの意図に対する信頼の観点に基づいた研究はまだあまり行われておらず、意義深いものと考えられる。

2.4 他の種類の信頼との関係と日米比較

上述の議論より、電力会社の意図に対する信頼を研究することの重要性が指摘されたが、この電力会社の意図に対する信頼は、人々が持っている他の様々なものの意図に対する信頼とは無関係だとは考えにくいであろう。たとえば、世間一般や企業一般、また政府などに対する信頼が低い人は一企業である電力会社の意図に対する信頼も低いと考えられる。従って、電力会社の意図に対する信頼を調べる際には、そのみならず、他のものに対する信頼との関

係を調べるのが重要であろう。

この点に関して、人々が世間一般に対して持っている信頼はアメリカの方が日本人より高いという知見が得られている⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾。すなわち平均してアメリカの方が日本人よりも「たいていの人他他人をだまそうとしたりしないだろう」と考えているのである。この知見から、世間一般に対する信頼の度合いが日本よりアメリカで高いのなら、電力会社の意図に対する信頼の程度にも同様の差が生じていることが考えられる。さらに重要と思われるのは、電力会社の意図に対する信頼が、企業一般に対する信頼や政府に対する信頼とどのような関係にあるかを明らかにすることである。もしこれらの信頼の関係が日米で異なっているならば、原子力発電の理解を得るための方策の効果が国によって異なる可能性がある。このように日米の対比を行うことによって、日本人が原子力発電および電力会社に対して持っている信頼の程度とその構造を明らかにすることは、今後の原子力発電の発展にとって重要であると考えられる。

以上の議論から本研究では、原子力発電の安全性に対する人々の信頼がどのような構造となっているのか、具体的には、他のどのような変数と関連があるか明らかにすることを目的として、質問紙を用いた調査を行う。そしてその際、アメリカと日本の比較を行い、この原子力発電の安全性に対する信頼の構造が日米に共通するものか否かを検討する。

3. 方法

3.1 調査対象サンプル

本調査では日本、アメリカそれぞれの国で2種類のサンプルを用いた。ひとつは両国の大学生を用いたサンプルであり、もうひとつは一般市民を用いたサンプルである。

3.1.1 大学生を用いたサンプル

アメリカでのサンプル数は合計246名であった。内訳は、シアトル市ワシントン大学152名、ロサンゼルス市カリフォルニア大学ロサンゼルス校94名である。日本でのサンプル数は合計928名であった。内訳は、北海道大学225名、埼玉大学14名、大阪

国際大学161名、東洋大学90名、佛教大学438名である。これらのサンプルからのデータはいずれも大学の講義への出席者を用いた。

3.1.2 一般市民を用いたサンプル

日本では札幌市から、アメリカではシアトル市から抽出した。いずれの市でも電話帳からランダムに抽出し、郵送法を用いて質問紙の回収を行った。札幌市での抽出数は300、回収数は208であり、シアトル市では抽出数が450、回収数は265であった。

3.2 質問紙

3.2.1 質問紙の開発

質問紙の開発は1993年に行われた2度の予備調査の結果にもとづいて行われた。最初の予備調査は1993年5月に日本人学生のサンプル(369名)のみを用いて行われた。この調査の目的は、項目分析を行ってその後の調査で用いる項目を選び出すことであった。2度目の予備調査は最初の予備調査の結果を基に抽出した項目群を含む合計21項目を用いた質問紙であり、日本人学生394名、アメリカ人学生300名を対象として行われた。この調査の目的は日米の反応傾向の差を調べることに、測定するスケールの信頼性を検討することであった。これらの調査でも、アメリカの方が日本人よりも世間一般に対する信頼が高いことが確認されている⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。

本調査ではこれら2度の予備調査で用いた項目から抽出したものと、新たに開発した項目を加えた質問紙を用いた。まずはじめに日本語版の質問紙を開発し、次に翻訳を行って英語版を開発した。その後、日本語への逆翻訳を行い、北海道大学の学生40人を被験者として用いてオリジナルの項目と逆翻訳をした後の項目の意味が同じかどうかを判定させた。その際には、各項目の意味が同じかどうかを被験者に判断させるのみならず、それぞれの項目への反応を実際に測定し、差異が認められないと判断した項目のみを採用した。

3.2.2 質問紙の構成

調査に用いた質問紙はリッカートタイプの項目が80、二者択一の項目が2、ヴィニエットタイプの項目が6、合計88の項目から構成されている。リッ

カートタイプの項目群の内訳は、サンプルの属性による反応傾向の差を調べるために作られた練習項目が2つ、世の中の不特定の他者に対する信頼である一般的信頼の測定を目的とした項目が19項目、コミットメントに基づく、ある特定の他者に対する信頼である個別的信頼の測定を目的とした項目が14、社会の制度やシステムに対する信頼を測定することを目的とした項目が15となっている。本研究の目的である原子力発電の安全性についての項目はこの社会の制度やシステムへの信頼を測定する項目群の1つであり、「Q14:原子力発電所の安全性について、電力会社は本当のことを公表していない」という項目である。この項目に対して賛成の程度を5段階に分けて尋ねた⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾。

3.3 調査手続き

日本での調査は1993年11-12月、アメリカでの調査は1993年12月に行われた。日米共に、学生からのデータは講義中に質問紙を配付し、回答方法を説明した後、その講義時間内もしくは翌週の講義時間に回収した。

一般市民からのデータ収集は日本とアメリカで異なる方法を用いた。まず日本では、電話帳からランダムに抽出した対象者に葉書で調査への協力を依頼した。葉書には調査の概要とその重要性が説明されており、さらに回答者の中から抽選で1万円を進呈するという内容が書かれていた。その後質問紙を郵送し、再度電話で協力の依頼を行った。その後、回答をしなかった対象者に対して再び質問紙を送り、協力を依頼し、これを計2回行った。回答者が質問紙を返送する際には、一旦無地の封筒に回答済みの質問紙を入れ、それを回答者の住所が書かれた返信用封筒に入れてから返送するという手続きをとった。返送された質問紙は一旦無地の内封筒のまま集められ、その後開封された。この手続きを行うことによって質問紙の回答内容に関しては匿名性が保たれ、なおかつ返送済みの対象者を特定できることになる。その結果、抽出者300人中、住所が変わっていたなどの者23名を除く、277名に質問紙が郵送され、回答数は208、回収率は75.1%であった。

アメリカ(シアトル市)での調査は、サンプル対

象者群を3つの条件に分類して行われた。最初の条件は、調査協力の依頼のみをするもの、2つめの条件は質問紙に回答すると5ドル(米ドル)を支払う旨を通知する条件、最後は質問紙と一緒に5ドルを郵送するという条件であった。回答者の依頼のみの条件では回収率は47.3%(150人中71人回答)、5ドルの支払いを約束する条件では58.0%(150人中87人回答)、質問紙とともに5ドルを送る条件では71.3%(150人中107人回答)であった。これらの条件を設定した理由は、回答率を上げるための効果的な手段を模索し、本研究の母体となっている、原子力安全システム研究所・社会システム研究所の主権による「信頼感の意味と構造に関する研究」(研究代表者:山岸俊男(北海道大学))における本格調査に役立てるためである。

4. 結果

分析の際には、国(日本、アメリカ)、性別などの他に以下にあげる変数を独立変数とした。なおアメリカで回収したデータのうち、母国語が英語ではない回答者のデータは削除して分析を行った。

4.1 主な独立変数

4.1.1 政府に対する信頼

「Q9:わが国の政治制度は全体としてうまく働いている」、「Q33:わが国の社会保障制度は、全体としてみればうまく働いている」のそれぞれの反応値の合計を2で割った値を用いた。

4.1.2 企業一般に対する信頼

「Q54:ほとんどの企業は、裏では不正直な取引をおこなっている」、「Q67:わが国の金融機関が、大きな経済困難を引き起こすような失敗をする可能性はほとんどない」の2項目を用いた。スケールの方向を統一するため、6からQ54の反応値を引いた値とQ67の反応値を足して2で割った値を企業一般に対する信頼とした。

従属変数	一般サンプル		学生サンプル	
	日本	アメリカ	日本	アメリカ
一般的信頼	3.50 (0.73) n=201	4.01 (0.65) n=234	3.20 (0.83) n=916	3.60 (0.61) n=193
	t(433)=-7.77 p<.01		t(359)=-7.06 p<.01	
電力会社の意図に 対する信頼	2.18 (1.22) n=208	2.53 (1.31) n=241	1.94 (1.15) n=924	2.63 (1.00) n=198
	t(447)=-2.94 p<.01		t(317)=-8.54 p<.01	
原子力発電に 対する態度	2.75 (1.02) n=204	3.08 (1.20) n=241	2.69 (0.97) n=918	2.96 (0.96) n=193
	t(443)=-3.17 p<.01		t(1109)=-3.51 p<.01	

表1 各サンプルにおける従属変数の平均値の日米比較 (カッコ内は標準偏差)

4.2 従属変数

4.2.1 原子力発電に対する態度

「Q37:原子力発電は、将来のエネルギー源として重要である」、「Q52:原子力発電の危険性はマスコミによって誇張されている」、「Q66:原子力発電所は、通常の火力発電所に比べ、環境破壊の程度が少ない」の3項目の反応値の合計を3で割った値を用いた。このスケールは原子力発電そのものに関するものであり、電力会社の意図に関するものではない。(α=0.64)

4.2.2 電力会社の意図に対する信頼

「Q14:原子力発電所の安全性について、電力会社は本当のことを公表していない」を電力会社の意図に対する信頼を測定する項目とした。以下に述べる分析では、スケールの方向を統一するため、6からこの項目の値を引いた値を用いた。

4.2.3 一般的信頼

「Q1:ほとんどの人は基本的に正直である」、「Q11:ほとんどの人は信用できる」、「Q13:ほとんどの人

は基本的に善良で親切である」、「Q35:ほとんどの人は、他人を信頼している」、「Q51:私は、人を信頼する方である」、「Q78:たいていの人、人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する」の6項目の反応値の合計を6で割った値を一般的信頼とした。(α=0.78)

4.3 従属変数の日米比較

一般的信頼、電力会社の意図に対する信頼、原子力発電に対する態度の日米それぞれの平均値を表1に示す。

この表1に示されるように、3つの変数すべてにおいて、日本よりアメリカの方が高い。さらにこの傾向は一般市民、学生ともに共通しており、t検定の結果すべての変数に有意差が認められた。¹

このことから日本人は、アメリカ人と比較して、不特定の他者に対する信頼は低いことがわかる。特に一般市民に関しては、この差は約3/4標準偏差ほどもあり、非常に大きいことがわかる。この結果は一見常識には反するようにみえるが、過去の研究結

¹従属変数を一般的信頼、電力会社の意図に対する信頼、原子力発電に対する態度とし、独立変数に国(日本、アメリカ)をとってサンプル毎(学生、一般)にt検定を行った。

果と一貫している⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。また一般市民、学生ともに、電力会社の意図に対する信頼、原子力発電に対する態度も一般的信頼同様、日本人の方がアメリカ人よりも低いことがわかる。特に学生サンプルにおける電力会社の意図に対する信頼の日米差は、標準偏差の半分ほどもあり、日米では大きな差があることがわかる。この結果は、日本人は電力会社の意図に対して不信感を持っているのではないかという先の議論を、ある程度支持するものであるといえよう。

4.4 政府に対する信頼の効果

上述の分析結果から、電力会社の意図に対する信頼及び原子力発電に対する態度について、日本人はアメリカ人よりも信頼が低く、態度もネガティブであることが示された。次に重要となるのは、これらの信頼や態度と他の信頼との関係が日米で同じであるのかそれとも異なっているのかという点である。この点を調べるために、政府に対する信頼を反応値に応じて3つのカテゴリー（低信頼、中信頼、高信頼）に分け、そのカテゴリーごとに電力会社の意図に対する信頼の平均値、原子力発電に対する態度の平均値を日米それぞれで算出した。その結果を図1および図2に示す。なおこの分析は一般市民からのサンプルのみを用いて行った。

図1、図2から示されるのは、まず政府に対する信頼が高いほど、電力会社の意図に対する信頼も高くなり、原子力発電に対する態度もポジティブになっていることである。そしてこれは日米に共通している。この結果から、日本においてもアメリカにおいても政府に対する信頼の高い人は電力会社の意図をそれほど疑わず、原子力発電に対してもポジティブな意見をもっていると解釈できる。しかしその信頼の程度はいつも日本人の方がアメリカ人よりも低い。それぞれの国毎に分散分析を行った結果、政府に対する信頼の主効果が有意であった。²

²従属変数に電力会社の意図に対する信頼、原子力発電に対する態度をとり、独立変数に政府に対する信頼（低、中、高）を用いて日本とアメリカそれぞれで分散分析を行った。その結果、従属変数が電力会社の意図に対する信頼のとき、日本では、 $df=(2, 205)$, $F=12.90$, $p<.01$, アメリカでは、 $df=(2, 238)$, $F=3.57$, $p<.05$ であった。また従属変数が原子力発電に対する態度の場合、日本では、 $df=(2, 201)$, $F=14.29$, $p<.01$, アメリカでは、 $df=(2, 238)$, $F=7.53$, $p<.01$ であった。

また図1で特徴的なのは、電力会社の意図に対する信頼の日米の差が、政府に対する信頼が高くなるにつれて小さくなっていることである。分散分析の結果、国と政府に対する信頼との交互作用が有意であった。³この結果は、政府に対する信頼の程度の電力会社の意図に対する信頼に及ぼす影響が、アメリカよりも日本で顕著であることを示している。従って、政府に対する信頼の高い人ほど電力会社の意図に対する信頼も高いという傾向は日本にもアメリカにも共通するが、その傾向の強さが日本とアメリカでは異なっており、日本の方が強いことがわかる。この結果の一つの解釈としては、日本人は電力会社と政府とを区別せずに認識しており、これがあ

また学生サンプルを用いて同様の分析を行ったところ、日本では、いずれの変数においても一般市民と同様の傾向が見られ、有意であった。電力会社の意図に対する信頼の平均値については、1.72(政府に対する信頼低)、2.05(政府に対する信頼中)、2.30(政府に対する信頼高)で、 $df=(2, 924)$, $F=18.26$, $p<.01$ 。原子力発電に対する態度については、2.51(政府に対する信頼低)、2.74(政府に対する信頼中)、3.12(政府に対する信頼高)で、 $df=(2, 915)$, $F=24.24$, $p<.01$ であった。しかしアメリカの学生サンプルの場合、電力会社の意図に対する信頼については、有意差は認められなかった。その平均値は2.55(政府に対する信頼低)、2.73(政府に対する信頼中)、2.58(政府に対する信頼高)で、 $df=(2, 195)$, $F=0.77$, $n.s.$ であった。原子力発電に対する態度の平均値に関しては、一般市民とは異なった傾向が見られ、傾向差が認められた。その平均値は2.90(政府に対する信頼低)、3.13(政府に対する信頼中)、2.64(政府に対する信頼高)で、 $df=(2, 190)$, $F=2.84$, $p<.10$ であった。このアメリカの学生の原子力発電に対する態度は、政府に対する信頼が高くなると一旦ポジティブになるが、政府に対する信頼がさらに高くなると今度はネガティブになっている。一般市民の場合は政府に対する信頼の高さに対応して原子力発電に対する態度もポジティブになっている。この違いが生じた理由について明確な証拠はないが、ひとつの可能性として、サンプル数がアメリカでは少なかったことが考えられる。政府に対し信頼が高い（高信頼群に属する）サンプルが日本では156人であったのに対し、アメリカでは25人であった。しかし、本研究ではこの点に関して明確な結論を出すことはできない。さらなる調査が必要であろう。

³従属変数に電力会社の意図に対する信頼、原子力発電に対する態度をとり、独立変数に国（日本、アメリカ）、政府に対する信頼（低、中、高）、企業一般に対する信頼（低、中、高）、国と政府に対する信頼との交互作用、国と企業一般に対する信頼との交互作用を用いて分散分析を行った。その結果、従属変数が電力会社の意図に対する信頼の場合、 $df=(2, 439)$, $F=3.45$, $p<.05$ で、国と政府に対する信頼との交互作用が有意であった。また、従属変数が原子力発電に対する態度の場合、 $df=(2, 435)$, $F=0.87$, $n.s.$ で、国と政府に対する信頼との交互作用は認められなかった。

学生サンプルを用いた分析では、従属変数が電力会社の意図に対する信頼の時、 $df=(2, 1115)$, $F=1.78$, $n.s.$ で有意とはならなかった。従属変数が原子力発電に対する態度の時、 $df=(2, 1101)$, $F=7.33$, $p<.01$ で有意であったが、脚注2で述べたように、この平均値は一般市民とは異なったパターンを示している。脚注2での議論と同様に、このパターンの差が事実なのか、サンプル数の少なさによるものなのかは本研究では明確な結論を得ることはできなかった。

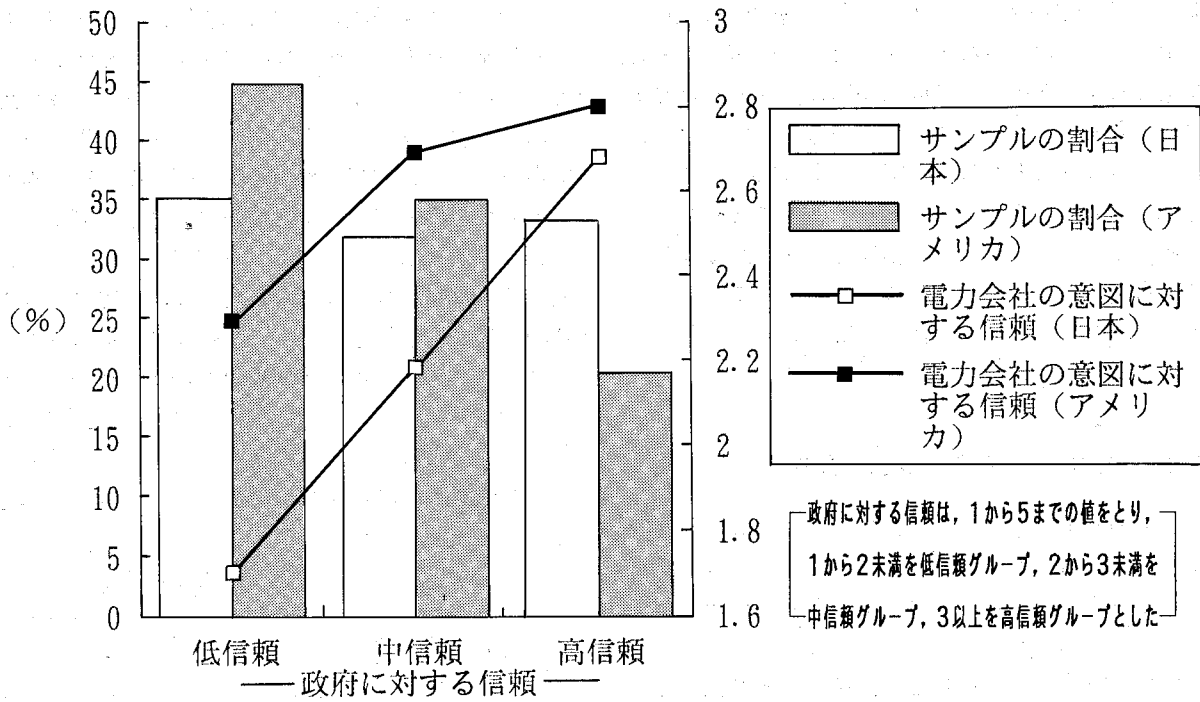


図 1 政府に対する信頼と電力会社の意図に対する信頼との関係

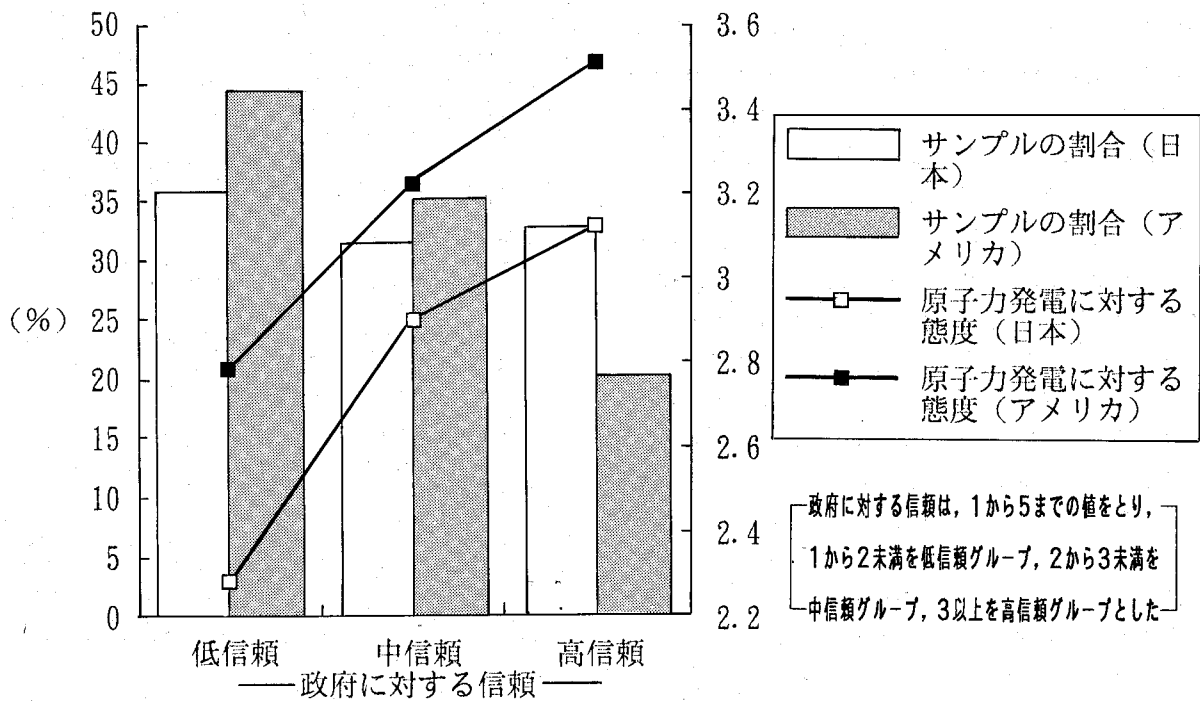


図 2 政府に対する信頼と原子力発電に対する態度との関係

る意味で日本に特有な傾向である可能性が存在していることが考えられる。

4.5 企業一般に対する信頼の効果

先の結果は、独立変数として政府に対する信頼を用いたものだが、では企業一般に対する態度とこれら従属変数との関係もまた同様なのであろうか。この点を調べるために、先の分析と同様に企業一般に対する信頼の程度を3つに分け、電力会社の意図に対する信頼の平均値、原子力発電に対する態度の平均値を国ごとに示した。この結果を図3、図4に示す。

この図3にも、図1と同様の傾向が見られる。つまり企業一般に対する信頼が高いほど、電力会社の意図に対する信頼が高くなっており、これは日米に共通している。さらにその信頼の程度も、いつも日本人の方がアメリカ人よりも低いという結果になっている。分散分析の結果、日米両国ともに企業一般に対する信頼の主効果が有意であった。

ただし、図4に示されるように、原子力発電に対する態度に関しては、アメリカでは企業一般に対する信頼と連動しているが、日本ではそれほど顕著ではない。分散分析の結果、アメリカでのみ企業一般に対する信頼の主効果が有意であった。⁴

⁴従属変数に電力会社の意図に対する信頼、原子力発電に対する態度をとり、独立変数に企業一般に対する信頼(低、中、高)を用いて日本とアメリカそれぞれで分散分析を行った。その結果、従属変数が電力会社の意図に対する信頼の時、日本では、 $df=(2, 205)$, $F=3.35$, $p<.05$, アメリカでは、 $df=(2, 238)$, $F=15.68$, $p<.01$ であった。また、従属変数が原子力発電に対する態度の場合、日本では、 $df=(2, 201)$, $F=2.17$, *n.s.*, アメリカでは、 $df=(2, 238)$, $F=11.15$, $p<.01$ であった。

また学生サンプルを用いて同様の分析を行ったところ、日本では、電力会社の意図に対する信頼が従属変数の時、一般市民と同様の傾向が見られ、有意であった。電力会社の意図に対する信頼の平均値については、1.73(企業一般に対する信頼低)、2.10(企業一般に対する信頼中)、2.45(企業一般に対する信頼高)、 $df=(2, 924)$, $F=20.39$, $p<.01$ 、一方、原子力発電に対する態度の平均値については一般市民とは異なり主効果が有意だった。平均値は2.54(企業一般に対する信頼低)、2.85(企業一般に対する信頼中)、2.93(企業一般に対する信頼高)で、 $df=(2, 915)$, $F=13.88$, $p<.01$ であった。アメリカの学生サンプルの場合、電力会社の意図に対する信頼については一般市民とは異なったパターンを示し、主効果は有意ではなかった。その平均値は2.52(企業一般に対する信頼低)、2.72(企業一般に対する信頼中)、2.65(企業一般に対する信頼高)で、 $df=(2, 195)$, $F=0.78$, *n.s.*であった。原子力発電に対する態度の平均値に関しては、一般市民と同様の傾向が見られ、傾向差が認められた。その平均値は2.77(企業一般に対する信頼低)、3.03(企業一般に対する信頼中)、3.23(企業一般に対する信頼高)で、 $df=(2, 190)$, $F=2.98$, $p<.10$ であった。

また図3、図4に特徴的な傾向として、アメリカでは企業一般に対する信頼が高くなるにしたがって、電力会社の意図に対する信頼と原子力発電に対する態度もポジティブになっているが、日本ではその傾向がアメリカほど顕著ではないことがわかる。つまりこの結果から、アメリカでは原子力発電、もしくは電力会社が企業一般と同じものとしてとらえられており、その傾向は日本よりも高いことが示唆されると思われる。この傾向について分散分析を行ったところ、従属変数が電力会社の意図に対する信頼の時のみ、国と企業一般に対する信頼との交互作用が有意であった。⁵

5. 考察

本研究では3つの重要な知見を得ることができた。1つは、電力会社の意図に対する信頼はアメリカより日本の方が低く、原子力発電に対する態度も日本の方がネガティブであることが示された点である。この結果はこれまでの研究での一般的信頼の日米差の傾向と一致するものである⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾。しかしなぜこのような日米差が生じるかに関してはまだ結論を得ていない。特に重要な点は、システムへの信頼が実際の日米のシステムを反映しているものなのかどうかを明らかにしなくてはならないことである。今後の研究課題といえよう。

2つ目の重要な知見は、企業一般に対する信頼が高いほど電力会社の意図に対する信頼も高いことが示された点である。この結果は、一見すると常識的に思われるが、例えばある企業が不正を行ったことが発覚すると、それが電力会社の意図に対する信頼までをも下げてしまう可能性のあることを示している。またその傾向は、日本よりもむしろアメリカにおいて顕著であり、従ってアメリカでは原子力発電

⁵従属変数に電力会社の意図に対する信頼、原子力発電に対する態度をとり、独立変数に国(日本、アメリカ)、政府に対する信頼(低、中、高)、企業一般に対する信頼(低、中、高)、国と政府に対する信頼との交互作用、国と企業一般に対する信頼との交互作用を用いて分散分析を行った。その結果、従属変数が電力会社の意図に対する信頼の場合、 $df=(2, 439)$, $F=3.06$, $p<.05$ で、国と企業一般に対する信頼との交互作用が有意であった。また、従属変数が、原子力発電に対する態度の場合、 $df=(2, 435)$, $F=1.96$, *n.s.*で有意ではなかった。

学生サンプルを用いた分析では、従属変数が電力会社の意図に対する信頼の時、 $df=(2, 1115)$, $F=2.26$, *n.s.*で有意とはならなかった。さらに、従属変数が原子力発電に対する態度の時、 $df=(2, 1101)$, $F=0.17$, *n.s.*で有意ではなかった。

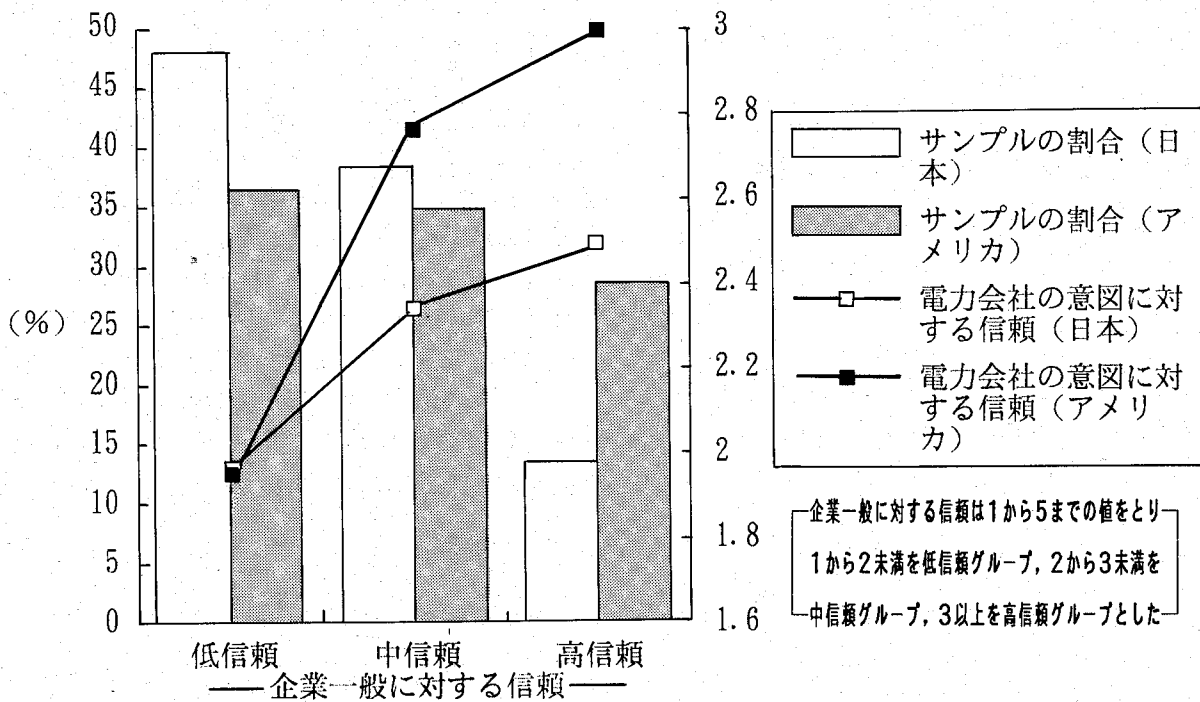


図3 企業一般に対する信頼と電力会社の意図に対する信頼との関係

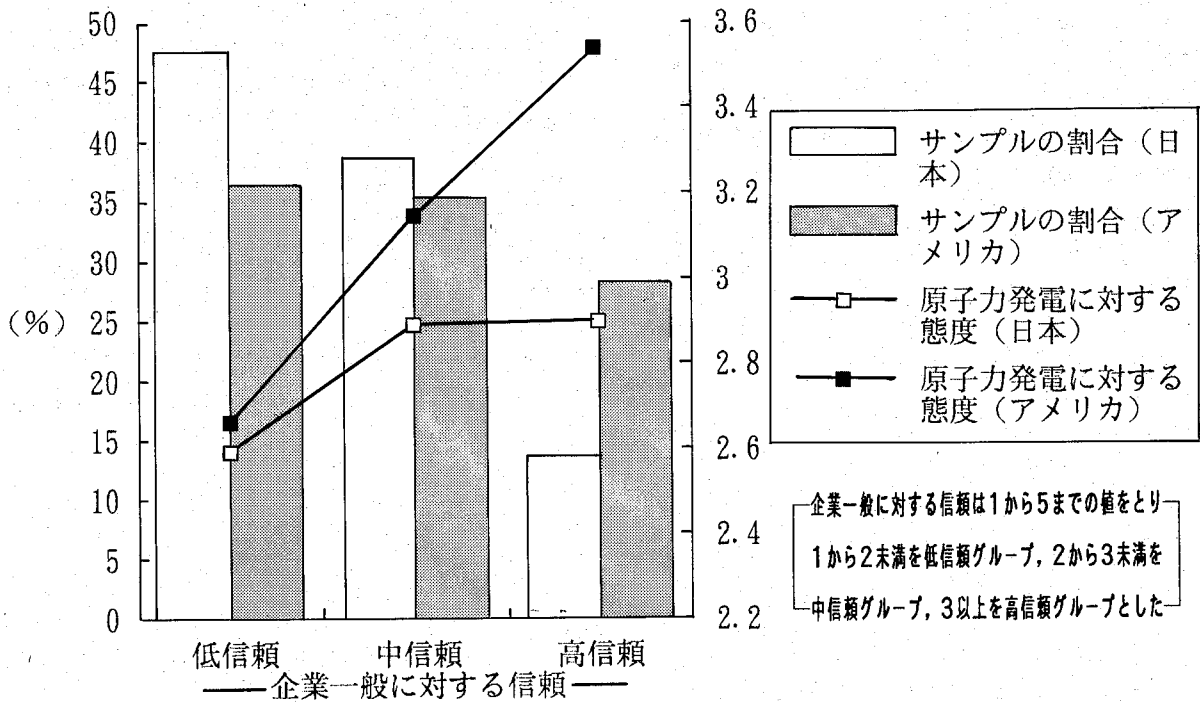


図4 企業一般に対する信頼と原子力発電に対する態度との関係

ないしは電力会社を企業一般の一部として考えられている可能性がある。

それに対し、3つ目の知見として、政府に対する信頼が高い程、電力会社の意図に対する信頼が高く、その傾向が日本において顕著であることが示された。この結果から、日本では電力会社は企業一般というよりむしろ政府と同じようなものとして認知されている可能性が示唆された。このことから、原子力発電の安全性についての電力会社の報告を信じるか信じないかは政府を信じるかどうかによって決まる可能性があり、これは日本に特徴的な傾向であることが示された。この結果は、我が国において、政府を信頼する人は、電力会社の説得にも応じてくれる可能性があるが、そうではない人はそもそも電力会社そのものの意図を信じていないという可能性があることを意味している。従って、我が国では原子力発電に反対する人に対して電力会社がいくら客観的な事実を示して説明をし、理解を求めようとしても、そもそも電力会社の意図に対して不信感を抱いているために、そのような説得は効果をあげることができないことになる。もしそうだとすると、原子力発電に理解を求めるPR活動よりも、まずその情報源である電力会社の意図を信頼してもらうことが重要となる。つまり、人々が「電力会社は我々をだまそうとしているわけではない」と思えるようになれば良いのである。この場合、どのようにして電力会社の意図を信頼してもらうかが重要となるが、これは本研究の問題ではない。この研究の結果から示唆されるのは、このような信頼を得るためには、単に一企業のみ信頼を得るのではなく、電力会社を含む企業一般と政府に対する信頼を得ることの必要性、あるいは電力会社は政府とは違うという考え方を一般の人々に持ってもらうことの必要性である。

6. 結語

以上、本研究で得られた結果の考察を述べたが、このような結論を出すには、まだ十分とはいえない。それは本当に原子力発電に反対の人は、電力会社の意図への信頼がないから反対しているのかどうかの結論をこの研究では出していないからである。もしかすると、原子力発電に反対の人は、実は電力会社を信頼していても、本当に説明の内容そのものに

反対している可能性がある。すなわち本研究は、意図に対する信頼のみの研究であり、能力に対する信頼と意図に対する信頼の重要度に関しては調べていない。従って上述の議論は、意図に対する信頼が重要であることを前提としたものである。この議論の有効性を確かめるためには、新たな研究が必要であろう。

また、本研究では分析の際には一般市民からのサンプルのみを用いたが、このサンプルは厳密には代表性のあるものとはいえない。電話帳に名前を載せている者のみを対象としているからである。この方法では、回答者が世帯主のみに偏ってしまい、ある年齢層の者のみを抽出してしまう可能性がある。また、脚注に示されているように、一般市民と学生サンプルでは結果が異なっている場合もある。このことからサンプリングによるバイアスがこれらの結果に影響を及ぼす可能性があることがわかる。従って本研究の結論を一般化するためには、より代表性のあるサンプルを用いた調査が必要であると考えられる。

このような問題点はあるが、本研究は今まで示されてこなかった日本に特有の原子力発電に対する信頼の構造を明らかにするための探索的な研究として、意義のあるものと思われる。そして今後の研究として、本研究の母体となっている「信頼感の意味と構造に関する研究」においてすでに本格調査が準備されており、これらの研究の中でより信頼性のある結果の提示と新たな問題提起が行えるものと期待される。

7. 謝辞

この研究は、原子力安全システム研究所・社会システム研究所の主催による「信頼感の意味と構造に関する研究」(研究代表者:山岸俊男(北海道大学))の一環として行われたものである。また本研究を行うにあたり、三隅二不二社会システム研究所長、山田昭同研究所副所長、山岸俊男教授(北海道大学)、亀田達也助教授(当時東洋大学、現北海道大学)には研究の実施から本論文の執筆に至るまで、大変お世話になった。また、林知己夫社会システム研究所研究顧問・統計数理研究所名誉教授には分析に際して有益なアドバイスをいただいた。ここに記して感謝

の意を述べさせていただきたい。また Karen Cook 教授 (ワシントン大学), Peter Kollock 助教授 (UCLA), 山岸みどり助教授 (大阪国際大学) にも大変お世話になった。同様に感謝の意を述べさせていただく。また調査の実施にあたり北海道大学大学院生の林直保子, 神信人, 高橋伸幸の諸氏からも多大の協力を得た。同様に感謝の意を述べさせていただく。

参考文献

- (1) 電気事業便覧 電気事業連合会 統計委員会編 1993.
- (2) 住民意識調査報告書 関西電力株式会社 1992.
- (3) 毎日新聞 1991年2月10日付け朝刊 1991.
- (4) 朝日新聞 1991年2月10日付け朝刊 1991.
- (5) Hass, R. G., Effects of source characteristics on the cognitive processing of persuasive messages and attitude change. In R. Petty, T. Ostrom, and T. Brock(Eds.), *Cognitive responses in persuasion*, 141-172. Hillsdale, NJ:Erlbaum. 1981.
- (6) Eagly, A. H., Wood, W., and Chaiken, S. An attribution analysis of persuasion. IN J. Harvey, W. Ickes, and R. Kidd(Eds.), *New directions in attribution research*, Vol.3, 37-62. Hillsdale, NJ:Erlbaum. 1981.
- (7) Yamagishi, T., The provision of a sanctioning system as a public good. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 110-116. 1986.
- (8) Yamagishi, T., The provision of a sanctioning system in the United States and Japan. *Social Psychology Quarterly*, 51, 264-270. 1988.
- (9) Yamagishi, T., 1988b, Exit from the group as an individualistic solution to free-rider problem in the United States and Japan. *Journal of Experimental Social Psychology*, 24, 530-542.. 1988.
- (10) 渡部 幹・林直保子・神 信人・高橋伸幸・山岸俊男・山岸みどり 個別的信頼と一般的信頼——質問紙調査, 日本グループ・ダイナミクス学会第41回大会発表論文集 126-127. 1993.
- (11) Yamagishi, T., and Yamagishi, M., Trust and commitment as alternative responses to social uncertainty., Paper present at the Network Conference, September 10-12, Whistler, British Columbia, Canada. 1993.
- (12) 林直保子・神 信人・渡部 幹・高橋伸幸・山岸俊男・山岸みどり, 信頼とコミットメント形成——実験研究, 日本グループ・ダイナミクス学会第41回大会発表論文集 124-125. 1993.
- (13) 山岸俊男・山岸みどり・林直保子・神 信人・高橋伸幸, 信頼の意味と構造——日米比較, 日本グループ・ダイナミクス学会第41回大会発表論文集 38-41.1993.

付録

質問紙 社会的態度についての調査

付 録

社会的態度についての調査

この調査は、日米両国の人々の考え方が、どのような側面で一致していて、どのような側面で違っているかを明らかにするために、北海道大学文学部とワシントン大学社会学部が中心となって計画し、両国の人々にお答えいただくものです。今回の調査の結果に興味をお持ちの方は、同封の申込み用紙にご記入の上、記入済の質問紙と一緒に返して下さい。調査結果の分析が論文となりしだい、一部お送りさせていただきます。

質問の内容は、あなたが日常生活の中で感じたり考えたりしていることが中心となっています。あまり深く考えないで、思いつくままお答え下さい。なお調査は無記名であり、しかも結果の分析は、すべての回答をいちど数字になおしてから統計的に行なわれますので、あなたの意見や考えが他人に知られる可能性は全くありません。また調査結果は純粋に学術的な目的のために用いられるものであり、営利目的のために用いられることはありません。

それでは、よろしくご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

札幌市北区北10条西7丁目
北海道大学文学部行動科学科
教授 山岸 俊男

アメリカ合衆国シアトル市
ワシントン大学社会学部
教授 キャレン・クック

まず最初に、回答方法になれていただくために、以下の2つの質問についてお答え下さい。それぞれについて、あなたのお考えに一番よくあてはまる番号に○印をつけて下さい。

a) 太平洋の広さは2億平方キロメートル以上である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

b) 世界中の穀物の年間総生産量は、平均して10億トン以下である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

最初の二つの質問にお答えいただけただけでしょうか？それでは、以下の質問のそれぞれについて、あなたのお考えに一番よくあてはまる番号に○印をつけて下さい。

1 ほとんどの人は基本的に正直である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

2 わが国の教育制度は、現在、重大な問題に直面している。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

3 人を信頼できるかどうかには、その人をよく知っているかどうかはあまり重要ではない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

4 私が信頼している人にも、私の知らない面がたくさんある。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

5 ほとんどの人は、口では何と言っても、本心では他人を助けるために骨を折ることをいやがっている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

6 わが国の政治は、特定の集団や組織を優遇している。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

7 私は、なるべく新しい相手に会うようにしている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

8 知らない人よりも、知った人のほうがずっと信頼できる。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

9 わが国の政治制度は、全体としてうまく働いている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

10 人々はいつも、自分だけの利益ばかり考えている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

11 ほとんどの人は信用できる。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

12 私は、知らない人に利用されないように、なるべく、よく知った人とだけつきあいたいと思っている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

13 ほとんどの人は基本的に善良で親切である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

14 原子力発電所の安全性について、電力会社は本当のことを公表していない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

15 よく知っている人だからといって、必ずしも信頼できるとは限らない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

16 社会制度がしっかりしていなければ、社会秩序の維持は困難である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

17 この社会の若者にもっとも必要なのは、きびしいしつけや規律である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

18 一緒に仕事をしている人々でも、あなたを利用しようとするところがあるだろう。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

19 世の中には偽善者が多い。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

20 他人を完全に信頼した場合、悲劇的な結果よりも幸せな結果になることのほうが多い。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

21 私は、少数の親友とだけつきあうよりは、なるべく、多くの友人を持ちたいと思っている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

22 駐車違反を減らすための最も有効な方法は、とりしまりの強化である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

23 わが国の裁判制度のもとでは、誰もが公平なあつかいを受けている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

24 嘘をつくことが悪いと確信している人はまれである。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

25 この社会では、人にだまされるのでないかいつも心配している必要はない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

26 人の本当の性質を判断するのに、その人についての評判はあまり役に立たない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

27 警察の力がいくら弱くなくても、社会がメチャメチャになるほどに犯罪は増加しないだろう。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

28 何か意味のあることをなしとげようとするなら、自分の評判をあまり気にするべきではない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

29 ほとんどの人は、人に信頼されるとその信頼にこたえようとする。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

30 世の中は一般に信じられているほど複雑^{かくまっ}ではない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

31 他人に対して公平であろうとして、自分にとって有利な機会^{まかい}を逃^{のが}すようなことはしたくない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

32 私は、同じ相手との関係を長く続けるほうである。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

33 わが国の社会保障制度^{しゃかいほしょうせいど}は、全体としてみればうまく働いている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

34 わが国の政府機関^{せいふきかん}は、無能^{むのう}な人々により運営^{うんえい}されている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

35 ほとんどの人は、他人を信頼している。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

36 わが国の経済システムは、全体として、他の産業国の経済システムよりも効率が悪い。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

37 原子力発電は、将来のエネルギー源として重要である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

38 私はこれまで、人に利用されてひどい目にあつたことはほとんどない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

39 今の世の中はすべてがどんどん変わっているので、何が良くて何が悪いのか、簡単にはわからない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

40 人にはみな邪悪な傾向があると考えておけば、困った目にあわないですむ。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

41 何をするにつけ、知らない人とするよりも、よく知った人とするほうが安心できる。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

42 ある人間が信頼できるかどうかは、数回ちゃんとした話をすればわかる。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

43 一般に、長くつきあっている人は、必要な時に助けてくれることが多い。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

44 この世の中には、弱者と強者の2種類の人間しかいない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

45 誰かがあなたをほめるのは、あなたから何かを得ようとしているからだ。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

46 政治家の良心にまかせていたら、政治腐敗は続くだろう。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

47 場合によっては嘘をつくことも正当化できる。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

48 人々はふつう、口で言っているほどには、他人を信頼していない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

49 知らない人と対応する場合、特に理由のない限り、相手を疑わない方がよい。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

50 ビジネスで成功するためには、良い評判を得ることが何よりも重要である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

51 私は、人を信頼するほうである。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

52 原子力発電の危険性はマスコミによって誇張されている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

53 われわれの社会における重要な決定の多くは、実は一般の人々の目から隠されている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

54 ほとんどの企業は、裏では不正直な取り引きをおこなっている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

55 世の中には、複雑すぎて私にはとても理解できないような人がいる。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

56 いくら刑罰を強くしても、刑罰では犯罪は減らせない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

57 マスコミの報道は、ほとんどの場合公平で公正である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

58 私が信頼する人間は、長くつきあってきた相手である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

59 社会問題を解決するためには、社会制度を変えるよりも人々の意識を変えるほうが良い方法である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

60 公平さは、この社会で一番重要な価値のひとつである。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

61 たいていの人々は、悪い評判が立つのを避けようとするため、あまり不正直な行いはしない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

62 私はどんな状況でも、不正直なことはしたくない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

63 私はどんな場合にもフェアプレイの精神を忘れないようにしている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

64 われわれの社会は、世界でも有数の公平な社会である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

65 この社会では、気をつけていないと誰かに利用されてしまう。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

66 原子力発電所は、通常の火力発電所に比べ、環境破壊の程度が少ない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

67 わが国の金融機関が、大きな経済困難を引き起こすような失敗をする可能性はほとんどない。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

68 私は少数の特定の人だけを信頼している。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

69 私は、いつも新しい可能性を求めため、同じ相手とはあまり長くつきあわないようにしたいと思っている。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

70 社会的公平を追及しすぎると、社会の活力が失われてしまう。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

71 政治家は信頼できる。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

72 私は、信頼できる人間である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

73 人に対して私が抱く第1印象は、たいてい正しい。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

74 私は、数万円程度の修理のために修理屋を探したら、電話帳や広告などで探すより、個人的な知り合いを通して探すだろう。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば そう思わない		どちらかといえば そう思う	そう思う

75 全く知らないセールスマンから中古車を買うよりは、友人が個人的に紹介してくれたセールスマンから買うほうが安心できる。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

76 全く知らない相手と重要な用件について交渉することになった場合、知り合いが自分をその相手に紹介してくれることは非常に重要である。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

77 医者^{いしや}は、個人的な知り^{しり}合い^{あひ}から紹介^{しょうかい}された場合には、普通^{ふつう}の患者^{かんじや}の場合よりもより丁寧に診察^{しんさ}する。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

78 たいていの人は、人から信頼^{しんらい}された場合、同じようにその相手を信頼^{しんらい}する。

1	2	3	4	5
そう思わない	どちらかといえば		どちらかといえば	そう思う
	そう思わない		そう思う	

79 ガソリンを入れたり、買物をしたりする場合、あなただったら次のどちらの方法をとりますか？

- 1 同じスタンドや店をいつも利用する。
- 2 値段とかその時々^{ときどき}の都合で、利用するスタンドや店を変える。

80 友人とつきあう場合、あなただったら次のどちらの方法をとりますか？

- 1 新しい友人を求めるよりも、同じ友人といつまでも長くつきあう。
- 2 自分の興味や環境^{かんきやう}の変化に^{したがって}、つきあう友人を変える。

81 ある人があなたに、1か月後には絶対に返すからと約束して、10万円貸してほしいと頼んできたとします。あなただったら、その人に10万円を貸すでしょうか？ a)、b) それぞれの場合について答えて下さい。

a) その人が非常に親しく、よく知っている人の場合。

- 1 絶対に貸さないと思う。
- 2 よほどの事情がある場合だけ貸すと思う。
- 3 貸す可能性は半々くらいあると思う。
- 4 ほとんどの場合には多分貸すと思う。
- 5 無条件に貸すと思う。

b) その人がたんなる知り合い程度の人の場合（二度以上会ったことがあり、あいさつ以上の会話をかわしたことのある程度の関係の人の場合）。

- 1 絶対に貸さないと思う。
- 2 よほどの事情がある場合だけ貸すと思う。
- 3 貸す可能性は半々くらいあると思う。
- 4 ほとんどの場合には多分貸すと思う。
- 5 無条件に貸すと思う。

82 もしあなたがその人に10万円を貸した場合、その人はそのお金を実際に返してくれる可能性はどれくらいあると思いますか。 a)、b) それぞれの場合について答えて下さい。

a) その人が非常に親しく、よく知っている人の場合。

- 1 絶対に返してくれないだろう。
- 2 返してくれる可能性はほとんどないだろう。
- 3 返してくれるかどうかは、半々だろう。
- 4 よほどの事情がないかぎり、多分返してくれるだろう。
- 5 何があっても絶対に返してくれるだろう。

b) その人がたんなる知り合い程度の人の場合（二度以上会ったことがあり、あいさつ以上の会話をかわしたことのある程度の関係の人の場合）。

- 1 絶対に返してくれないだろう。
- 2 返してくれる可能性はほとんどないだろう。
- 3 返してくれるかどうかは、半々だろう。
- 4 よほどの事情がないかぎり、多分返してくれるだろう。
- 5 何があっても絶対に返してくれるだろう。

83 あなたは10万円入った財布を落としてしまいました。その財布にはあなたの名前と住所が入っています。もしある人がその財布を拾ったとして、その人はあなたにその財布とお金を返してくれると思いますか？ a)、b) それぞれの場合について答えて下さい。

a) その人が非常に親しく、よく知っている人の場合。

- 1 絶対に返してくれないだろう。
- 2 返してくれる可能性はほとんどないだろう。
- 3 返してくれるかどうかは、半々だろう。
- 4 よほどの事情がないかぎり、多分返してくれるだろう。
- 5 何があっても絶対に返してくれるだろう。

b) その人がたんなる知り合い程度の人の場合（二度以上会ったことがあり、あいさつ以上の会話をかわしたことのある程度の関係の人の場合）。

- 1 絶対に返してくれないだろう。
- 2 返してくれる可能性はほとんどないだろう。
- 3 返してくれるかどうかは、半々だろう。
- 4 よほどの事情がないかぎり、多分返してくれるだろう。
- 5 何があっても絶対に返してくれるだろう。

最後に、あなたご自身についておたずねします。

あなたの年齢は [] 才

あなたの性別は [1 男 2 女]

あなたの学歴は

- 1 中学校（旧制小学校）卒業
- 2 高等学校（旧制中学・旧制女学校）卒業
- 3 短大、専門学校卒業ないし在学中
- 4 大学卒業ないし在学中
- 5 その他 []

学歴が上の③か④にあたる人の場合、在学中のあなたのご専門は

[]

あなたが子供の頃（10才前後）に住んでいたのは、

- 1 農村・漁村など
- 2 地方の町や小都市
- 3 地方の中都市
- 4 大都市およびその周辺

調査にご協力いただき、本当にありがとうございました。